資料８－２

2019年度及び中期目標評価（4年終了時）に係る
公立大学法人福知山公立大学業務実績評価調書
【小項目別評価】

（抜粋）

氏名＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

(3)小項目別業務実績・自己評価結果

項 目 別 の 状 況

第４　教育研究等の質の向上に関する目標

１　教育の質の向上に関する目標
（１）教育の成果に関する目標

小項目数（中期計画）	小項目数（年度計画）
16	31

中　期　目　標	教育研究において、地域、自国、そして世界に対する理想を持ち、教養・専門的知識を生涯にわたって学修し、それを実践する力を涵養する。 特に、地域協働型教育研究を通して、創造的思考力、課題解決力、協働・協調力、コミュニケーション力など、社会人に必要となる基礎能力を涵養する。地域社会そのものを教育の場としたフィールドワークやインターンシップに主体的に取り組み、地域の人や資源を教材とした教育研究を実践する中で、地域社会が抱える様々な課題解決に向け、関係者や関係機関等との協議調整、企画立案や提案を行うことができる人材を育て、地域社会に還元する。

中期計画番号	中期計画	業務の実績（中期計画）	自己評価	評価委員会による評価結果（中期計画） 評価のポイント・委員会確認事項	評価区分	年度計画番号	年度計画	業務の実績（年度計画）	自己評価	評価委員会による評価結果（年度計画） 評価のポイント・委員会確認事項	評価区分
１　教育研究等の質の向上に関する目標を達成するための措置											
（１）教育の成果に関する目標を達成するための取組											
	①自由な発想と行動力、分析企画力、実行力、公共マインドの涵養										
1	大学の理念の実現と発展に必要な長期的な戦略を計画し、地域に根ざし、世界に通用する高い専門能力と多角的な視点を持ち、さらに、地域社会の様々な分野におけるニーズに対応した指導的役割を果たせる人材を育成するための自由な発想と行動力、分析企画力、実行力、公共マインドを涵養する。	【2016年度～2019年度の総括】 ・大学の理念を実現するため、2017年度に地域経営学部のカリキュラムを改定し、地域と協働でフィールドワーク等を行う演習科目を必修化するとともに、幅広い知識、多角的な視点を養うために教養科目の充実を図った。2020年度の情報学部設置に向けて、カリキュラムを作成するとともに既存学部のカリキュラムの体系化を進めるため、ナンバリング、履修モデル、カリキュラムツリーの作成を行い、また、シラバスの充実を図り、地域人財（グローカリスト）の育成における方向性の確立に努めた。 【2020年度・2021年度の見込】 ・2017年度に策定したカリキュラムの卒業生を2020年度に輩出するため、本カリキュラムの検証を行う。また、教養科目や地域協働型教育研究など、地域経営学部と情報学部の教育・研究上の具体的な連携の方法について検討する。	4			1	・新学部の設置に伴い、既存学部のカリキュラムを見直し、ディプロマポリシーの実現を意識しつつ、2020年度新カリキュラムを策定する（編成実施方針、科目配置表等）。 新学部の開設に合わせた教学体制の整備の一環として、カリキュラムにナンバリングを付し、新学部も含めて大学全体で教育課程の体系性を確保する。ナンバリングの体系化は2019年末に完成させ、2020年度には学生に公開し、完全施行する。ナンバリングを付すことにより、学生にとっては、体系的、計画的に履修することができ、教員は体系的で効果的な履修指導を行うことができる。	・情報学部の設置に伴い、両学部間で調整の上、共通教育科目の見直しを行った。また、専門科目についても見直しを行い、新設する情報学部に対応した2020年度カリキュラムを作成した。 ・共通教育科目及び地域経営学部と情報学部の専門教育科目に科目ナンバリングを付し、大学全体の教育課程の体系を確保した。これに加え、体系的かつ計画的な履修を促すため地域経営学部は履修モデルの見直しやシラバスの充実（シラバス項目の見直し、教務委員会によるシラバスチェック）、演習科目のルーブリックや修学カルテの試行的導入などを行った。また、学部学科ごとのカリキュラムツリーも作成した。	4		
						2	・一部の授業では、学外講師を招聘することにより、自由な発想と行動力、分析企画力、実行力、公共マインドを養成する。その適切性は、学生の授業評価アンケートなどから検証する。学外講師にも本学の３ポリシーを意識頂くよう努める。教務委員会で学外講師のカリキュラム上の必要性と位置づけを明確にする。また、FD委員会とも協力し専任教員への大学の理念の浸透を図る。	・学外講師を招聘した結果、学生の授業評価アンケートで、「ゲストスピーカーの話を聞くことで学んだことの理解が深まった」「様々な視点や考え方を知ることができた」などの声があり、様々な業種の現場の生の声を取り入れることで深い学びに繋がり、自由な発想と行動力、分析企画力、実行力、公共マインドを養成した。 ・学外講師にも本学の理念や3ポリシーを周知するため、選考時の説明や毎年度の始めの履修の手引きの配布など、本学の理念の共有を図った。 ・専任教員には、入職時のガイダンスの説明や履修の手引きの配付等により周知している。	3		
	②行動・実践の基盤である生きていくための総合力（人間力）を涵養する教養教育の重視										
2	幅広い視野と豊かな人間性を涵養し、創造的思考力、課題解決力、協調・協働力、コミュニケーション力といった社会人基礎力など、行動･実践の基盤である生きていくための総合力（人間力）を涵養するためにインターンシップ等も取り入れた教養教育を実践する。	【2016年度～2019年度の総括】 ・社会とのつながりの中で学びを深め、社会人基礎力を養うため、2017年度及び2020年度の二度にわたるカリキュラムの改定により、本学ではインターンシップ（グローカル特別講義（地域キャリア実習））や国際フィールドワーク、病院実習といった実習科目を積極的に取り入れた授業を実施してきた。これにより、課題解決力、協調・協働力、コミュニケーション力などを涵養している。 【2020年度・2021年度の見込】 ・地域経営学部では、これまでと同様にインターンシップ（地域キャリア実習）や国際フィールドワーク、病院実習といった実習科目の履修を積極的に促す。情報学部ではPBL（課題解決型学習）を実施するとともに、3年次生に配当されているインターンシップの実施に向けて、実習先を確保する。	3			3	・授業科目である「国際フィールドワーク」においては、海外における地域事情を知ることを目的とし、中国でのフィールドワークを行う。現地学生との交流を行い、世界的視野で考え、足元から行動する能力やコミュニケーション力を養う。	・授業科目「国際フィールドワーク」において、9月2日から7日に3人の学生が中国研修を行った。中国の農村地域を訪問し、中国型地域づくりの手法を学び、農村社会の発展の現状を把握できた。現地の若者達と地域づくりの課題解決を巡って日中両国の知見を交換した。国際フィールドワークの全体を通して、学生達は広い視野を身につけ、自ら行動する能力やコミュニケーション能力を養った。	3		
						4	・課題解決型の実習を「地域キャリア実習」という科目名で、2019年度も引き続き実施する。座学で学んだことを現場で実践する機会を与えることで学士力、社会人基礎力の養成に努める。	・学士力・社会人基礎力を養成するため、インターンシップ協力先の開拓を強化し、北近畿地域の事業所を中心に52事業所からプログラムの提供を受けた。その結果、22事業所に延べ61人の学生がグローカル特別講義Ⅲ（地域キャリア実習Ⅰ）に参加した。学生にとって、「地域で働くこと」「仕事観･人生観を醸成」「残りの学生生活ですべきことを明確にする」という点で貴重な機会となった。実習後は、実習参加者全員が報告書（A4・2枚）や実習日誌の提出、ポスター報告を実施し、10日以上の実習参加者14人（23%）に対して単位認定をした。 ・11月28日には実習の内容と成果をまとめて、ポスターセッション形式の報告会を実施した。	3		

	③理論と応用の学びを踏まえた実践・実習による学びの徹底										
3	様々な地域課題に対し、質の高い理論による専門教育と地域協働型の実践教育を通じ課題解決能力を養成し、協議調整や企画立案を行うことができる人材を育て、地域社会に還元する。	【2016年度～2019年度の総括】 ・地域協働型教育の実践を行い、地域の課題と直接向き合うフィールドワークを福知山市をはじめとした北近畿地域で展開してきた。2016年度から地域協働型実践教育成果報告会を毎年2月に開催し、連携先による講評の機会を設けている。また、現地報告会を実施するなど、プレゼンテーション能力や課題解決能力の向上に努めた。 ・地域協働型の教育での学びは、修学カルテによる自己評価に加え、演習科目ではルーブリックを活用し、演習における知識・技能・遂行能力の習熟度の評価を明確化した。 【2020年度・2021年度の見込】 ・情報学部を設置したことで、幅広い分野で地域連携を行うことが期待されていることから、連携先の開拓を随時行う。地域経営学部においては、引き続き積極的に地域との接点を持ち、地域課題と向き合う教育を実践していく。	4			5	・理論と応用の学びを踏まえた実践・実習による学びを強化し、学修アウトカムの達成度を見るためにルーブリックを作成する。ルーブリックは、学生の課題を確認し、その成長に資するものであり、webシステムの導入とも合わせて、1年生科目「地域経営演習Ⅰ、Ⅱ」で試行的に導入する。	・理論と応用の学びを踏まえた実践・実習による学びを強化し、学修アウトカムの達成度を見るためにルーブリックを作成した。1年次生科目「地域経営演習」の成績評価にあたって、「知識」「技能」「遂行能力」について、作成したルーブリックを用いてその習熟度を測ることにより、従来のクラスによる評価のばらつきを一定程度抑制する効果があった。1年次生科目「地域経営演習Ⅰ・Ⅱ」で試行的に実施し、さらに効果の検証を行った。	4		
	④主体的な学びの支援・推進										
4	学生のリーダーシップやモチベーションを向上させる取り組みを進めるとともに、ワークショップ等のグループ学修を含め、共感性を養いながら学生自らが主体的に学修を進めるアクティブ・ラーニングを推進する。	【2016年度～2019年度の総括】 ・地域で活躍するキーパーソンを一部の授業のゲスト講師として招いたほか、行政職員の現場の声を聞く機会を設け、授業内容を深めるだけでなく学生のモチベーション向上に取り組んだ。 ・授業に適宜グループワークやグループディスカッションを取り入れることで、学生の主体性やコミュニケーション能力を養った。 ・教育効果を検証するため、2019年度後学期から学生の自己評価により学修の習熟度（プロジェクトの実施経験やリーダーシップ、他者とのコミュニケーション等）を修学カルテに蓄積している。 【2020年度・2021年度の見込】 ・学生が学びを深めるために、引き続き、適切な形でゲスト講師の招聘やグループワーク、グループディスカッションを授業に取り入れていく。	4			6	・学生プロジェクトへの単位付与を実施する。2020年度より本格実施に向けて見直しを行う。単位認定の基準としては2単位に相当する時間数を確保することとした。（科目はグローカル特別講義である）	・2019年度前学期に10件の学生プロジェクトを採択した。そのうち、学生プロジェクト「キャリアパス0.1」について単位を認定した（1件・7人）。	3		
						7	・ポートフォリオは、導入する学務システムの機能を用いて、2019年度前期中に詳細を決定するとともに、2年生から試行的に導入する。	・教育効果の検証とプロジェクトの実施経験やリーダーシップなど学生自身の学修の習熟度や大学生活での学びや経験を記録するためのツールとして「修学カルテ」という名称で本学におけるポートフォリオを作成した。ポートフォリオは、教学情報システム「WebClass」の修学カルテ機能を用いて試案を作成し、後学期のオリエンテーションにおいて、2年次生を対象に試行的に実施し、学びを振り返る機会を設けた。 ・試行実施の結果を踏まえて内容を修正し、新年度に向けたオリエンテーションにて、新2年次生から4年次生を対象にポートフォリオを実施する。	4		